

〈老い〉という贈り物

井口 昭久さん著

みんなの本

診療の現場で考えたこと、感じたことをつづったエッセー集。老いと病気を通して、生きる日常を軽妙なタッチで描く。

著者の井口さんは1970年に名古屋大医学部卒業後、同大の医局に入る。同大付属病院長を経て、愛知淑徳大健康医療科学部教授、名大医学部名誉教授。老年学会会長も務める。

かつて食道がんを患ったが、幸いなことに消えたという。前立腺がんも見つかり、70歳で治療を受け、これも消失。食道がんは再発したが、内視鏡手術が成功した。

診療する「こちら側とあちら側」で何が違っているのだろう。現代ニッポンで目の前の老化という現実とどう向き合う



か。実は「老人差別は老人にある」という事実が目覚めた。死に向かっていく予感を感じるが「老い」へのまなざしも丁寧に描く。

電子カルテでは苦勞もある。操作は看護師の方が上手で隷属気味。看護師は尿意まで察するようになり、まるで看護されている気分だとか。

四六判、182頁。1540円(税込み)。名古屋市中区大須1の16の29、風媒社＝052(218)7808＝発行。

2021年8月18日(水) 中日新聞 朝刊 13面
この記事は中日新聞社の承諾を得て転載しています。